

# 朱元璋と文人たち

福本雅一

一

喪乱の世に、微賤の最下層から身を起こし、皇帝の極位にまで成り上った朱元璋には、その出自故のさまざまな劣等感があった。しかし皇帝の威厳を保つためには、それを朝廷において、また群臣の前で不用意に露呈することはできず、そのため却って歪んだ形で衝動的に暴発することがあった。彼は猜疑心が深く残忍酷薄で、寛仁大度とは縁がなかったが、それは育った環境から自衛し、苛烈な生存競争に勝ち抜くためには、不可欠な条件であって、他に選択の余地のない、鞏固な性格であったといえよう。

朱元璋は本能的な嗅覚で敵と味方を嗅ぎ分け、後者に対しても常に警戒を怠らなかつた。そして粗暴ではあるが比較的単純である武臣たちよりも、阿諛追従し面従腹背の多い文臣たちに、決して心を許そうとはしなかつた。むかし梁の朱全忠が、清流を自認する儒生たちを、黄河の濁流に投げこんだ、いわゆる白馬の禍は、知識分子に対する不信の報復として有名であるが、いつの時代においても、

皇帝にとって、巧言令色の文臣たちは、心を置けぬ不気味な存在であった。しかし歴史の教訓では、彼ら知識分子の協力がなければ、政権奪取の戦略構想や、国家経営のための礼楽制度のみならず、文化の維持や経済の発展さえも期待できない。「豈に馬上を以って天下を治む可けん乎」で、武力で天下を一時制圧できたとしても、守成はおろか、創業さえも容易ではない。

『朱元璋系年要録』<sup>1)</sup>は、彼の生涯を次の五期に分けて、その行跡を詳密に記録している。則ち、

- 一、元末農民大起義（一三五四―一六三）
- 二、封建兼并戦争（一三六四―一六八）
- 三、明王朝洪武初期（一三六八―一七九）
- 四、同 中期（一三八〇―一九〇）
- 五、同 後期（一三九〇―一九八）

である。彼が生まれたのは、元の文宗の天曆元年<sup>（一三二八）</sup>で、その前半の四〇年は、元の衰運に乗じて崛起し、群雄を平定して大都を占領するまで、その後半の三〇年は、新しい王朝の創建に奮闘した時期といえよう。そしてここに論ずる文人たちの多くは、その生涯の大半を

元の統治下に過ごした者たちである。因みに言えば、開国の元勳たち、宋濂は一九歳、陶安は一九歳、劉基は一八歳、李善長は一五歳、朱元璋に先行し、元の順帝も九歳年長であった。

彼らはすべて、元季の混乱が天災や飢饉や黄河の氾濫が決定的な要因ではなく、元廷の宴楽による紀綱の弛緩、風俗の頹廢にあったことを知悉していた。しかし彼らは新しい王朝に覆轍を誠めると共に、モンゴルの支配下において驥足を展べる機会を得なかったにも拘らず、却って平穩無事であったその統治に郷愁するといった、矛盾した心情をも抱いていた。

幼時、父母長兄をすべて失ない、皇覺寺に入つて僧となり、淮西一帯を托鉢放浪していた朱元璋は、二五歳の至正一二年、濠州に挙兵した郭子興に従い、戦功によって九夫長に任ぜられ、彼の養女馬氏を娶った。三年後に郭子興が死ぬと、朱元璋は代つてその軍を領し、紅巾軍の小明王韓林児を迎え、彼を推戴して大宋国を建て、その年号龍鳳を用いた。しかし韓林児は単に紅巾の象徴的な存在にすぎず、朱元璋はただその權威を利用しただけであった。彼は附近の諸勢力を吸収してその軍団を拡張し、独自の戦略を立てた。彼を成功に導いたのは、長江を渡つてまず太平（当塗）を占拠し、続いて集慶（後の南京）を奪取したことである。

しかし朱元璋が渡江を謀つたのは、兵糧の不足であった。当時の淮南は兵乱と飢饉によって、「過ぐる所焚劫し、老弱を啖いて糧と為すに至る」といった悲惨な状況であったから、李善長もこれに賛成し、「我が兵衆くして食少なし、舟楫備わらざれば、以つて江左の利を争うに足らず、姑小く之を俟て」と、機会を窺っていた時、巢湖の将愈通海や廖永安が、舟師万余、糧数万石を以つて来歸した。

この水軍は大雨に乗じて長江へ脱出し、直ちに牛渚鎮に達し、采石を抜いた。ここで諸将は、「和州の饑を以つて、争つて資糧を取り、歸らんことを謀」つたが、朱元璋は「江を渡りて幸いに捷つ、若し舎てて歸らば、江東は吾が有に非ざる也」と説き、悉く纜を断つて舟を長江の急流に放つてしまった。この決断が運命を拓り開いたのである。

初め、朱元璋に従つた者は七百人にすぎず、徐達・湯和・費聚等で、李善長と常遇春が少し遅れて加わつた。渡江が成功したのは全くの天祐であつたが、その後、急速に勢力を伸長し得たのは、殺戮掠奪を厳禁したことによる。「明祖以不嗜殺得天下」は、

明祖は布衣を以つて帝業を成す、其の力を得る処は、総て殺人を嗜まざるの一語に在り、初め李善長に遇うに、即ち漢高の豁達大度、殺人を嗜まざるを以つて勧めと為す、……是の時、群雄並びに起り、惟だ子女玉帛を事として、生靈を荼毒す、独り明祖は世を救い天下を安んずるを以つて心と為す、故に仁声義聞、至る所降附し、攻戦の力の大半を省く、

と指摘するが、そのことに伴つて、江南の人材が多くその幕下に加わつたことが、朱元璋が元の勢力のみならず、各地に割拠する群雄の打倒に成功した最大の要因である。陶安・陳遇・詹同等がそれぞれあるが、彼らはみな救世安民の策を献じ、儒教と士大夫を尊重することを教えた。

朱元璋は趙翼が言うように、「明祖は初め書を知らず、而して好んで儒生に親近し、今古を商略す」ることで、次第にその眼界を拡張見識を高めていった。そしてその人物が有能で信頼するに足ると判断すれば、過去の閥閥は殆んど問わなかつた。渡江以前の朱元璋

集団は、ただ郷曲保全の土豪集団にすぎず、野口鉄郎も、

彼の集団が決して農民革命軍ではなく、当初から既存の体

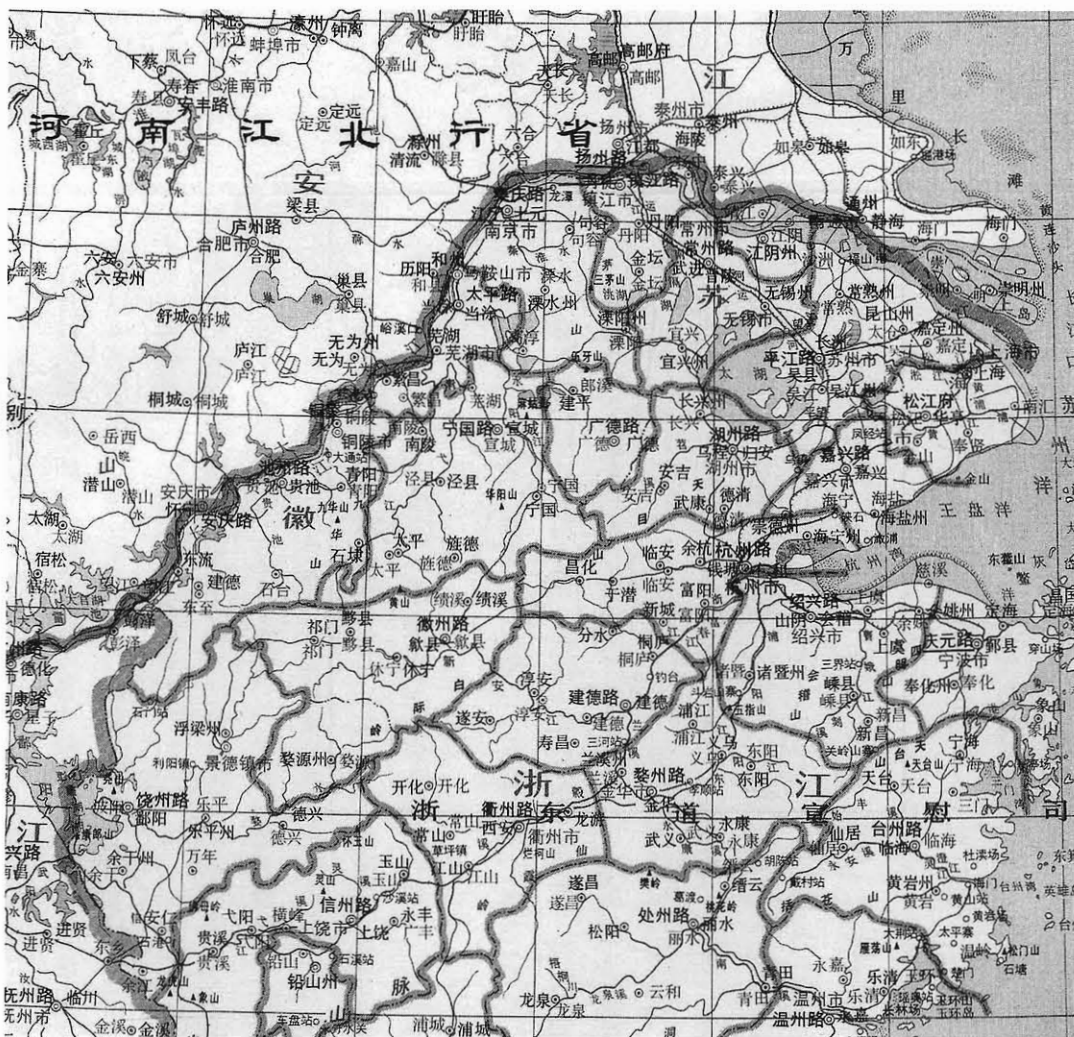
制勢力を背景としつつ、それを伸張拡大した土豪

連合軍としての色彩が極めて強い、

と指摘して、彼に帰附し協力した主たる一三四人の出身地について、安徽九九・江蘇七・浙江八等と具体的な数字を挙げ、圧倒的に多い安徽については、鳳陽府六六・廬州府二八・徽州府四・太平府一とし、その帰附の年代については、至正一三二一—一三五五（一三五二—一三五五）の四年間に、すでに過半の七五名に及び、渡江の年には、氏が「儒学的素養によって従軍した」と考える者が、実に一三名に達している。

それまでの朱元璋集団は、当面の敵に勝利することのみを目的とし、現状に対応する戦術によって行動していた。先述したように、渡江の目的も、まず糧食の確保であり、軍紀を厳正にしたのも、ただ事を容易に運ぶ方策にすぎなかった。しかし陶安以下の知識分子を収めて、その意見を聴き、討論を重ね、百忙の中に文字を識り、文義を理解し、努力学習することによって、経史の大意に通じるように生長していた朱元璋は、すでに武力だけでは一切の問題を解決できず、不屈の勇氣も文章の感化力に及ばぬことを理解し始めていた。そして口頭の巧みな宣伝が、時として武力行使よりも安価で、かつ効果的であることを知ると、江南を征服して北伐を開始するに際し、「胡虜無百年之運」や、

「驅逐胡虜、恢復中華」のスローガンを強調し、華北の地主・官僚の恐怖心を転化して、明に対する協力を勧め、モンゴルがいかに中



浙江省地図 『中国歴史地圖集 元・明时期』(地图出版社出版、一九八二年)より

国の伝統文化を破壊し、政治を腐敗させ、人民を苦しめたかを説いた。「喻中原檄」は宋濂が起草したものであるが、これは元朝の急速な崩壊に決定的な威力を発揮し、そのため北伐の総指揮官徐達は、微弱な抵抗を排除するだけで、大都を無傷のまま占拠することができたのである。そしてこの間、朱元璋はすでに達意の文を草し、有韻の詩さえ作れるようになっていた。

## 二

朱元璋は渡江以来十四年、努めて人材を収攬し、彼らの謀画によつて、西の陳友諒、東の張士誠を敗り、北伐して大都を奪い、元を漠北の彼方に逐つて、再び漢族の王朝を創建することに成功した。この経緯を彼自から次のように述べている。

朕は時に喪乱に遭い、初めは郷土より起り、本と自から全うするを図る、渡江以来に及びて、群雄の為す所を觀るに、徒に生民の患と為る、而して張士誠・陳友諒尤も巨蠹と為す、士誠は富を待み、友諒は強を待むも、朕は独り恃む所無し、惟だ人を殺すを嗜まず、信義を布き、節儉を行ない、卿等と心を同じくして共に濟す、初め二寇と相い持し、士誠尤も近きに逼る、或いは謂う宜しく先ず之を撃つべしと、朕は友諒の志驕り、士誠の器は小、志驕れば則ち好んで事を生じ、器小なければ遠図無きを以つて、故に先ず友諒を攻む、鄱陽の役、士誠は卒に姑蘇を出づること一步、以つて之が援を為す能わず。向に先ず士誠を攻め使めば、浙西は固を負いて堅守し、友諒は必ず国を空しうして来り、吾れ腹背に敵を受く矣、二寇既に除かれ、北の

かた中原を定む、

これは後述する如く、謀臣劉基の基本戦略に拠るものであったが、これは「英豪を用うること、飢渴の如く」であった朱元璋の期待に、士大夫の俊傑が応じた結果であった。

彼は知識分子を籠絡するために、即位直後より使者を四方に派遣して、賢才を広く求め、彼らを礼遇し、その能力を藉りて、治国安邦の実を挙げようとした。仲尼の道を尊崇することによって、彼らの歛心を購い、礼教を重視することによって、創業の基礎を鞏固にしようとしたのである。洪武元年九月、朱元璋は次のような詔を發している。

天下の治、天下の賢共に之を理む、今賢士多く巖穴に隠る。豈に有司、敦勸に失なう歟、朝廷、礼待に疏なる歟、抑そも朕の寡昧にして賢を致すに足らず、將た在位の者壅蔽して上達せざら使むる歟、然らずんば賢士大夫、幼に学び壯に行なうも、豈に世を没するに甘んずる而矣なる哉、天下甫めて定まり、朕は諸儒と治道を講明せんと願う、能く朕を輔けて民を濟う者有らば、有司礼遣せよ、

そして二ヶ月後には、文原吉・詹同・魏觀・呉輔・趙寿等に命じ、天下を分行して賢才を訪求させている。そればかりか朱元璋はしばしば知識分子を宮中に招き、宴を設けて各人と詩を賦し、古今を商榷し、文学を評論して、彼らに対する尊重を示した。

翌洪武二年、大都を陥した徐達から、元の『十三朝実録』が送られてきた。朱元璋は早速、李善長に『元史』の編纂を命じた。正統論の紛糾によって、『宋史』の完成が遅れ、元末に至って『遼史』『金史』を併立することに決着したことに懲りたのか、何故かこの

創業の最初の文化事業は、遽しく開局され、僅か七閱月で完成した。参画編修に任じたのは、<sup>⑪</sup>監修は李善長、総裁は宋濂と王禕、編修官は汪克寛・胡翰・宋億・陶凱・陳基・趙璜・曾魯・高啓・趙汭・張文海・徐尊生・黄箴・傅恕・王錡・傅著・謝徽の一六名である。

短期に急がれたために、この『元史』は、歴代正史中では最低の評価に甘んじ、その欠点は多くの史家に容赦なく剔抉されているが、それはともかく、告成後、彼らはみな紛々と辞任した。朱元璋は金幣を賜って彼らを慰勞し、続いて『礼書』の編纂を依頼したが、参加したのは曾魯ただ一人であった。歴史を後世に伝えることは、史事に明るい文人の義務である。彼らはみなその学芸において、当時一定の影響力をもつ知識分子であったが、彼らが参加したのは義務感からであって、利禄を求めためではなかった。彼らの伝記はみな『明史』文苑一に収められているが、その趙璜伝には、「山林遺逸の士を徴して、纂修官と為す」とある。朱元璋は故意に隠棲していた彼らを引き出し、朝廷に出仕させることによって、その威光を示そうとしたのであるが、彼らは好餌には目もくれず、袖を払って去って行った。そして彼らは殆んど呉越の出身で、かつて張士誠の支配に安住していた者である。この拒絶は朱元璋の皇帝としての自尊心を著しく傷つけたに違いない。しかし前代の遺老を優遇することは、新しい皇帝の寛仁を示す重要な儀礼でさえある。

当時、江南の文壇を支配していたのは、張士誠の累招を謝絶して、松江に寓居していた鉄厓楊維禎であった。「海内の薦紳大夫と東南の才俊の士、門に造りて履を納ること虚日無し」と、『明史』はその声望を伝えるが、前述の『礼書』を企画した時、翰林の詹同に厚幣を奉じて彼を招かせた。「豈に老婦の将に木に就かんとして、再

び嫁を理むる者有らん邪」と、維禎は謝つたが、朱元璋は諦めず、翌年も使者を遣わした。彼は「老客婦謡」を賦し、皇帝ができないことを強制するならば、「蹈海の死有る耳」と、却って朱元璋を威嚇した。安車を賜って迎えられ、編纂の叙例がほぼ定まると、再び安車で帰って行った。宋濂はこの時の彼を、「受けず君王五色の詔、白衣もて宣示せられ白衣もて帰る」と讃えたが、これも或いは朱元璋の意を傷つけていたかも知れない。

高啓（一三三六―一三七四）は明初を代表する詩人で、楊基・張羽・徐賁と共に吳中四傑と称せられ、初唐四傑がそうであったように、みな悲惨な最期を遂げた。先述のように彼は『元史』の編纂に加わったが、『明史』によれば、彼はまた命じられて諸王を教授し、洪武三年の秋、朱元璋が闕楼に御した時、彼は謝徽と共に入対し、戸部右侍郎に擢んでられたが、「年少にして敢て重任に当らず」と固辞したため、白金を賜って放還された。ところが彼の詩に帝を諷刺した所があったのを、久しく嘖んで心に秘めていた。

高啓は蘇州知府魏觀と親しく、頻繁に往還していたが、彼が府治を修築した際、張士誠の故第に建てたことを讒言され、その時「上梁文」を書いたというので、高啓も牽連して腰斬の刑に処せられた。年は三十有九。

袁凱は松江華亭の人で、元末に府吏となった。楊維禎の席上で「白燕詩」を作り、ために袁白燕と称されたことは有名であるが、洪武三年に出仕し、御史を授けられた。当時、武臣は功を恃んで驕恣となり、罪を犯す者が少なくなかった。彼は「諸將は兵事に習うも、恐らくは未だ君臣の礼に悉せず」と奏したので、朱元璋は諸將を午門に集めて書を説かせた。ある時、帝は囚人の判決を皇太子に

命じて覆審させたところ、太子は多く減刑したので、袁凱にとちらが正しいのかと尋ねた。彼は「陛下は法の正、東宮は心の慈」と対えた。帝は彼が老獪で両端を持するのを憎み、投獄した。「金台紀聞」によれば、のち宥されて参朝すると、そのたびに帝は、「是れ両端を持する者」と、常に非難し辱めた。袁凱は身の危険を感じ、風疾を得たと詭つて、金水橋で仆れてしまった。帝は真偽を確めるため、木をその体に鑽じこむと、彼はその激痛に耐えて動かなかった。そこで帝は、こんな奴は役に立たぬと放逐した。危うく命拾いした彼は、鉄索を頸に繋げ、自から体を毀したが、朱元璋はそれでも彼を気にかけて、あの東海の大鰻鱺はどこに行つてしまつたやらと、使者をその家に遣わした。彼は使者をまじまじと見つめて「月兒高」を歌った。月兒高は恐らく当時の童謡の類であろう。帝は報告を聞いて、始めて彼を本当の狂人と信じたという。また同書は故老の言として、袁凱は麵を炒めて砂糖をまぶし、犬や豚の糞のように見せかけてそれをばら撒き、匍いつくばつてそれを食つていたという話柄を加えている。

### 三

淮南と江北の間についた叛乱軍は、紅軍または紅巾軍と呼ばれ、「虎賁三千、直到幽燕之地。龍飛九五、重開大宋之天」という聯を旗に掲げていたが、東西両系の紅軍は連携を欠き、その指導者も統率力も發揮できず、小集団に分かれたまま、或いは元軍に敗れて消滅し、或いはより強大な勢力に併呑されてしまった。

陶宗儀は当時の状況を、至正丙申、浙西の諸軍はみな兵火を蒙り、

明年六月、紅軍は貨財婦女を掠奪し、彼の姪始善が殺されたと記す。宗儀は浙江黃巖の人であるが、浙の東西を師を求めて流浪し、元末に松江華亭に居を定めた。この紅軍はもちろん朱元璋の集団で、先述した渡江の際の軍律が、必ずしも守られていなかったことを示している。

彼の『輟耕録』は、当時の最も貴重な証言集であるが、「想肉」という一条があり、

天下の兵甲、方に盛んにして、淮右の軍は人を食うを嗜み、小兒を以つて上と為し、婦女は之に次ぎ、男子は又た之に次ぐ、或いは両缸の間に坐せ使め、外より逼るに火を以つてし、或いは鉄架上に於いて生きながらに炙る、

といい、続けて、沸湯中に煮た後に皮を去り、或いは袋に入れたまま巨鍋で煮たと述べ、男はその両腿を断ち、女は両乳を剝り、酷毒万状、具に言う可からず、総て想肉と名づく、以為く、之を食えば人をして之を想わ使むる也、

と説いている。一度人肉の味を占めると、また食いたいと思う、というのである。この残酷は恐らく当時の江南に知れ渡つていた。

四先生が集慶に招かれた時、朱元璋は章溢に、「今天下紛々として、何時か定まらん乎」と問うた時、「天道無常、惟だ徳のみ是れ輔、惟だ人を殺すを嗜まざる者、能く之を一にせん耳」と彼は対えたが、実際にその暴虐を見て、こう言つたのである。幼より悲惨な逆境に育ち、常に生死の間に放浪していた朱元璋は、人情の酷薄と、その極限の残忍を知悉し、かつそれに馴れ親しんでさえた。彼の嗜虐性は習性となつて、殺害の方法もまた残忍を極めた。『聖君初政記』によれば、処刑法の幾つかを、次のように述べている。

重辟には凌遲処死の外、刷洗有り、鉄床に腥置し、沃するに沸湯を以つてし、鉄帚を以つて皮肉を刷去し、梟するに鉤を以つてせ令むる有り、脊に鉤して之を懸く、竿縛と称する有り、竿杪を置き、彼の末に石を懸けて之に称わしむ、抽腸有り、亦た架上に掛け、鉤を以つて穀道のどに入らしめ、腸を鉤して出だし、彼の端石に却放す、屍起たてば腸出づ、剥皮有り、酷吏の皮を剥ぎて公座に置き、代る者をして坐せ令め、警めて以つて懲らしむ、数重なる者有り、亦た膝蓋を挑する有り、錫蛇游有り、凡そ以上は大愆の辟也、

このように説明した後には、『祖訓』を作るに迫んで、それらを厳禁した。「至れる哉、聖心の仁なる矣」と作者は讃えているが、これはそれ以前は平然と実施されていたことになる。最初の刷洗は、陶宗儀の言う所と同じである。同書は更に、

高祖は頑民を悪み、緇流を竄するも、聚犯者衆し、乃ち地を掘りて其の身を埋め、十五井列し、特だ其の項を露わさしめ、大斧を用いて之を削す、一削して数顆頭を去り、之を鐘頭会と謂う、

というが、ある神僧の首は、幾度斬つても元通りになったので、遂に彼を釈し、この会も罷めた、と加えている。

朱元璋の嗜虐性は、功臣の妻にも及んだ。常遇春は朱元璋軍団随一の猛将として知られ、十万の衆を將いて天下に横行せん、と豪語していたので、「常十万」と称されていた。ところが『龍興慈記』<sup>(22)</sup>によれば、彼に嗣子がなかったため、太祖は憫れんで二人の宮女を賜った。しかし彼は悍妻を恐れて、容易に手をつけなかった。ある朝、盥櫛を捧げた宮女の美しい手を見て、「好白手」といったまま

参内した。帰ると一つの紅い盒はこが置いてある。啓くと内にはその宮女の断たれた手があった。彼は錯愕して度を失ない、太祖にその故を問われても、答えることができなかった。再三面詰された末、ようやく事実を告白したが、太祖は笑って、「再び賜うも何ぞ妨げん」といい、彼を酔わせている間に、力士に命じて彼の妻を肢解はらばらにし、悍婦の肉と称して、功臣たちに分賜したという。しかし『明史』本伝には、彼の二子、茂と昇が附記されているから、これが事実とすれば、洪武初年のことであろう。

朱元璋はよく、卑賤の身を奮つて漢を興こした劉邦に比べられるが、後者が彭越を醢かして、その肉を群臣に賜ったという有名な故事から、この話柄は創作されたのかも知れない。しかし逸話というものは、何か実体が色濃く投影されているものである。因みに言えば常遇春も、その残忍において太祖に劣らず、『剪勝野聞』<sup>(23)</sup>によれば、常開平遇春は驍猛絶世、状は獼猴さるに類し、指臂に修毫多し、過ぐる所の地、士卒を縦ちて剽掠せしめ、故に其の兵特に鋭し、とあり、また明末清初の周亮工の証言によれば、「常開平は師を出だす毎に、夜に必ず一婦人を御す、曉あくれば輒すなわち其の頭を断ちて以つて去り、然る後に臨んで敵に対す」というが、このようなことが一度はあったかも知れないが、「後人の誤伝耳」と推測している。

しかし殺戮を平然と行なっていたことは、朱元璋集団の中では日常茶飯事であつた。ついでに徐達の妻のことを紹介しておこう。

中山王徐達の夫人謝氏は、膂力は絶倫、百斤もある鉄器を常に手にして、軍中に随つていた。朱元璋が宝位に登ると、登朝して皇后馬氏を見るたびに、不平を洩らし、「我が家は爾の家に如かざるや」と言つたことがあるという。后がそのことを太祖に告げると、徐達

が入朝した時、太祖は彼に酒を飲ませ、その間に兵をその邸に遣わして謝氏を殺させて、「今日卿は赤族の災を免る可し」と伝えたという。赤族とは族誅のことである。これらの伝聞は、今となつては確認のしようもないが、当時の朝廷の殺伐とした雰囲気は、多少とも伝えているのであろう。

『廿二史劄記』中に趙翼は、次の二事を引くが、まず「重懲貪吏」に、貪吏の贓六十兩以上の者は、梟首にして衆に示し、屍体の皮を剥いで中に草を詰めこみ、それを官府の公座の旁に懸け、みな目に触れて心に警めさせたという。この惨刑を見て朝官は戦々兢とし、同「明祖晚年去嚴刑」には、少しでも法に触れると、忽ち処刑されるので、京官は毎日入朝に際して、必ず妻子に訣を告げ、暮に無事に帰れば、また一日活きのびたと喜びあつたという。

#### 四

運命を波に委ねて長江を渡つた朱元璋は、決して容易に江南を征服したのではなかった。太平を占拠した後、集慶を攻略するまで、実に九ヶ月を要したが、朱元璋は「我が来るは民の為に乱を除く耳、其の各おの安堵すること故の如くせよ。賢士は我れ之を礼用し、旧政の不便なる者は之を除かん」と布告し、三万六千に及んだ降兵を安んじ、集慶を応天府と改め、夏煜・孫炎・楊憲等十余人の人材を登用した。

しかしこの時、元將定定は鎮江を扼し、別不華・楊仲英は寧国に屯し、青衣軍張明鑑は揚州に拠り、八思爾不花は徽州に駐し、石抹宜孫は処州を守り、その弟厚孫は婺州を守り、宋伯顔不花は衢州を

守り、池州はすでに徐寿輝に奪われ、張士誠は淮東で敗れて平江（蘇州）を陥れ、浙西に転戦していた。朱元璋は、長江に沿う西は池州から、東は鎮江に至る僅かな地域を確保したにすぎなかった。周囲の強敵を打破するには、軍事戦力だけでは到底不可能である。彼が主として陶安の策を用いて成功したように、更なる発展のためには、謀略に長じて才智に富む策士や、地方の統御や民政に熟達した官僚の協力が、必要不可欠であつた。

朱元璋は以後、出身を問わず、かつて敵対していた元朝の臣も、能力を認めれば直ちに重用した。徐達が鎮江を陥した時、彼はかねてその才を慕っていた秦從龍を招くため、朱文正に白金文綺を奉じて遣わした。『豫章漫抄摘録』には、

事は大小と無く皆な之（從龍）と謀り、毎に竹板を以つて問答すること甚だ密なり、左右皆な知る能わず、……毎歳從龍の誕生日には、上は世子と俱に遺贈有り、或いは親しく其の家に至り、之と宴飲す、……

とあり、彼の死に際しては、「親しく其の棺を撫して之を哭す、……諸儒臣中、始終優礼の厚きは、未だ從龍に過ぐる者有らざる也」と結んでいる。

陳遇（一三三—一三八四）は元末に温州教授になつたが、官を棄てて建康に隱棲し、静誠先生と称されていた。秦從龍の推挙によつて朱元璋に仕えたが、あらゆる頭位榮爵を辞しつつ彼を輔佐した。『万曆野獲編』は、「前後二十一年、日として太祖の左右に在らざる無きも、……造膝の語、一として世に伝わる無し、其の品の高く、見の卓なるは、劉・宋諸公の及ばざる所の者有り」といい、『明史』は、「寵礼の隆、勲戚大臣も与に比する者無し」と評している。



王世貞は「元遺諸臣」<sup>(33)</sup>と題して楚材晋用を説き、

元は劉誠意の輩を識拔する能わず、之を下僚に困め、以つて我が太祖に遺る。亡びざらんと欲するも、烏ぞ得可けん耶、諸君子は夷を棄てて夏に就き、垢を滌い新に向かう、

と論じた後、「首陽の風遠し矣」と歎じて、危素・秦從龍・張以寧・王時・程儒漢・詹同・羅復仁・劉基・李善・張昶・安然・朱守仁・李質・曾堅・蕭肅・宋濂・王僕・劉三吾等の人びとを列挙している。しかしこれら諸臣の中には、已むを得ず朱元璋に降つた者も少なくなく、首鼠両端を持ち、左顧右眄に終始した無節操も多い。

例えば危素（一二三〇—一三七二）は、元に仕えて翰林学士承旨に至つたが、朱元璋はその文学を重んじて礼遇していた。ある時、屏外の足音を聞いて誰かと問うと、「老臣危素」と対えた。帝は低く笑つて、「朕は文天祥と謂えるに乃ち爾なる也」と皮肉り、しばらくして彼を和州に謫して、余闕の墓を守らせた。余闕（一二三〇—一三五八）は陳友諒に抗して、安慶で戦死した元の忠臣である。危素は間もなく失意と屈辱の中で、そこに歿したが、彼も決して自から進んで明に降つたのではない。明軍が大都に入った時、彼は報恩寺の井に投じようとしたが、寺僧に「国史は公に非ざれば知る莫し、公死せば是れ国史を死せしむる也」と止められ、史庫を守つて元の実録を保全した。『明史』<sup>(34)</sup>によれば、謫居を命ぜられたのは、御史王著が、「素は亡国の臣、宜しく侍従に列すべからず」と論劾したためであるという。亡国の臣という点では、先の秦從龍と陳遇も同様であるが、彼には何か性格的な欠陥か、人に嫌悪される行為があったのであろう。『間中今古録摘抄』<sup>(35)</sup>には、次のような逸話が記されている。

元の宮廷に養なわれていた象が、はるばる応天府に連れてこられ

たことがあつた。その象は群臣の宴席では常に拝舞したが、新しい朝廷では伏して起とうとせず、遂に殺されてしまった。翌日、二つの木牌に次の対句が記されていた。

危不如象 危うきこと象に如かず

素不如象 素より象に如かず

危素の二字を首に据えて、彼の節操が象にも及ばぬ、と譏つたのであつた。

周伯琦（一二九三—一三六九）は篆書に精しく、『説文字原』や『六書正譌』等の著書もある書家として有名であるが、政府の頭官を歴任した後、江浙参政となつた。彼は張士誠の招諭に応じて、そのまま江南に留まり、原官のまま張氏にも仕えていた。張士誠は朱元璋と対抗するために元朝に降つて、表面的にはその支配を受け入れていたからである。張氏が滅ぼされると、故郷の鄱陽に帰つたと『元史』<sup>(36)</sup>本伝は記し、「時の多難に遭いて、而も自から保つに善し」と称賛しているが、『剪勝野聞』<sup>(37)</sup>では、朱元璋は「元君は汝に寄するに心膂の責を以つてせしに、乃ち賊に資して、以つて乱を為す耶」と怒り、「三日の間は大酔せしめてその功に酬い、後に之を戮す」と述べている。また同書は、司徒呂伯昇という者も、張氏に仕えながら、国情の虚実を朱元璋に通じていたので、佞臣として斬られたという。

また元末の戸部尚書であつた張昶は、朱元璋に使ひした時、その才敏を認められ、また前代の典故に通じていたために、国初の諸制度を建置する際に手腕を發揮した。しかし失節を悔いて心は怏々として楽しまなかつた。当時はまだ大都は降らず、拔郭帖木兒も健在であつたので、彼は太祖に娯樂を勧め、刑法を厳にし、賦役を重く

して民心を離反させようと試みた。偶たま元の降將たちを放歸させた時、彼は「身在江南、心思塞北」という八字を書いて彼らに托した。この事が洩れて彼は誅されてしまったが、『七修類稿』はその行為を、「亦た姜維の志也、豈に元に忠なる者に非ず乎」と称揚している。

趙翼は「明初文人多不仕」において、「丁野鶴（鶴年）戴良の仕えざるは、故国を忘れざるを以つて也」と説き、また「元末殉難者多進士」では、元代には儒を重んじなかったが、延祐中（一三三〇—一三三二）に科挙を設けてより、幾度か改廢はあったものの、「末年に節に仗り義に死する者は、乃ち多く進士出身の人に在り」と論じ、余闕・台哈布哈・李齊・李猷・郭嘉・王士元・趙璉・孫撫・霸炳元・劉耕孫・綽羅（丑閭）・彭庭堅・布延布哈（普顏不花）・伊嚕布哈（月魯不花）・穆爾古蘇（邁里古志）等の名を挙げ、「諸人、科名に負かざる者と謂う可し、而して国家の科を設け士を取るは、亦た徒らならず矣」と結んでいる。

彼らはみな忠に死んだ者であるが、捕われて屈せず、節義を全うした者もある。蔡子英は元末の進士で、拡郭帖木兒の幕僚となったが、兵敗れて捕われ、京師に送られた。朱元璋は官を授けようとしたが固辞し、一夜大哭して止まなかった。その故を問うと、「他無し、故主を思う耳」と答えた。太祖もその志の奪う可からざるを知つて、塞北に放還せしめたという。洪武九年冬のことである。

九靈山人戴良は浦江の人であるが、乱を呉に避け、また海に泛んで拡郭の軍に加わろうとしたが、果せなかった。洪武六年に南に帰り、同一五年、召し出されたが仕官を固辞し、翌年寓舎に自殺した。丁鶴年は西域出身の巨商であったが、元季の喪乱に江南の各地を

転徙し、つぶさに辛酸を甜めた。しかし終始故国を忘れず、「庚申（順治帝）北遁の後は、飲泣して詩を賦し、……一篇一句、皆な憂君愛国の心、之を読めば涕泗の横流するを知らざる也」と、錢謙益は評している。

方国珍が浙東の沿海に拠つて叛乱を起こした至正八年（一三三八）以来、戦火は淮南から中原に蔓延し、更に江南各地に拡大した。その間、元朝から派遣されていた地方官の採り得る方途は、抵抗か降伏かであり、その結果は殉節か誅殺か、或いは新しい征服者に再仕するか隱退するかであった。朱元璋自身も、元の忠臣に対しては鄭重に待遇し、『明史』に「蒙古・色目人の才能有る者は、擢用を許す」という態度を示していた。元の遺臣の運命は、先に寓目した如く、その都度個別的に定まったので、彼らの所遇に関しては、一定の原則というものには存在しなかった。しかし統一に至る版図拡大の過程で、異なる地域から知識分子が参加してきた。朱元璋はそれでは彼らに対してどのように対応したのであろうか。

## 五

最後に、明朝の創建に最も貢献した、浙南の文臣の運命をたどつてみよう。まず宋濂（一三一〇—一八一）。『明史』卷一二三は、開国の功臣と称される劉基・宋濂・葉琛・章溢の四名を収める。宋濂は元末、翰林編修を授けられたが、老親の故を以つて辞し、龍門山に入つて著述していたのを、朱元璋が婺州を取った至正一九年（一三五九）、召見して五経の師とした。翌年三月、李善長の推薦で他の三名と共に応天に至つた。

濂は基に長ずること一歳、皆な東南に起こり、重名を負う、基は雄邁にして奇気有り、而して濂は自から儒者と命ず、基は軍中の謀議を佐け、濂も亦た首として文学を用つて知を受け、恒に左右に侍し、顧問に備わる、

と本伝は述べるが、朱元璋はこの時、「我れ天下の為に四先生を屈す」と喜んだ。彼が遂に江南を平定したのは、特に劉・宋の功が大きい。卷末の賛には、

太祖既に集慶を下し、至る所に豪雋を収攬し、名賢を徵聘す、一時、韜光韞徳の士、幡然として道に就く、四先生の若き者は、尤も傑出と為す、基・濂は學術醇深、文章古茂、同一代の宗工と為る、而して基は則ち籌を帷幄に運らし、濂は則ち從容として輔導す、開国の初めに於いて、王道を敷陳し、忠誠恪慎、卓なる哉、佐命の臣也、

と絶賛している。

宋濂は洪武二年に『元史』を修し、総裁官に充てられた。翰林請官の師となり、また十余年に亘つて太子の傳を勤め、一代の礼楽制度を多く裁定した。彼は性誠謹で、人の過失を口にせず、官中の事を洩らしたこともなかった。

猜疑心の強い朱元璋は、多く密偵を放つて諸臣の動静を監視させていたが、宋濂がある時、客と宴飲していた翌日、帝は昨日の終始を尋ねた。濂は飲酒のこと、客の名、酒肴に至るまで偽わらず対えたので、「誠に然り、卿は朕を欺かず」と喜んだと『明史』はいう。しかし彼が老齢になって、洪武一〇年、骸骨を乞うて帰郷するに際し、帝は毎年、万寿節には入覲せよと命じた。王鏊によれば、ある年、上京して帝との宴した後、共に文樓に登ったが、濂は階段で躓

いてしまった。帝はそれを見て、「先生老いたり矣、明年は復た来ること無かる可し」と慰めた。しかし明年になるとそのことを忘れてしまい、今年はどうして宋先生は来ないのかと怪り、心配して使者を遣わすと、濂は元気で郷人と会飲し、詩を賦していたことが判明した。『剪勝野聞』には、帝が濂の子璩と孫の慎とに尋ねたところ、「不幸にして旦暮の憂有り、惟だ陛下は哀矜し、其の罪讎を裁け」と対えたところ、事実がこうであったので、大いに怒り、濂を誅しようとしたのであるという。恐らく璩も慎も父祖の消息を知らずに答えたのである。この時、太子は師の濂を救おうとしたが、聴かれなかったばかりか、「汝が天子と為るを俟ちて之を宥せ」と、帝に叱りつけられてしまい、太子は畏れて金明池に身を投じたが、幸いに救われた。帝はそれを聞くと、その際、衣履のまま飛びこんで太子を救おうとした者に三級を擢で、衣を解き烏を脱いだ者は、みな斬つたという。またこの日、皇后馬氏も帝に蔬膳を供したので、帝が故を問うと、「宋先生は今日死を賜う、故に蔬食して以つて冥福に資す」と答えたので、帝も感悟して急馬を馳せ、処刑を中止させたという。こうして宋濂は茂州に安置されることになり、『明史』はただ、「其の明年、夔に卒す、年七十二」と記すに止まるが、『守溪筆記』は、四川の某寺に憩つた時、濂は老衲と語り、仏教では因果応報を説くが、「吾が平生の為す所、自から以つて愧ずる無し、何ぞ是に至る哉」というと、その僧は、「先生は勝国（元）に於いて官為る乎」と質した。編修と答えると、僧は黙りこんでしまった。彼が自経したのはその夜のことであった、と述べている。

このことは当時秘かに語り伝えられ、尤も『明史樂府』酔学士も、詳しくこれに触れる。

朱元璋は宋濂の故を以つて、璩と慎とをしばしば教誡し、濂に笑つて「卿は朕の為に太子諸王を教え、朕も亦た卿の子孫を教う」と言つたことがある。「祖孫父子、共に内庭に官し、衆は以つて榮と為す」と『明史』は記すが、このような君臣の信頼関係が、此末な一事で、どうして一挙に崩壊したのであるうか。宋濂の死の前年、胡惟庸の獄に連累して璩も慎も誅殺され、家属は悉く茂州に遷されたというが、これが一代の儒宗宋濂の憐れな最期であった。

宋濂の死については、詹長皓の專論<sup>30)</sup>がある。彼は官撰の史志がその死を曖昧にし、私録がその死因を明言し、葬地までも明確にすることによつて、後者を真実とし、かつ高弟の方孝孺が、「公が斯の世を厭いて居らず、迹を峨岷に遠ざくるに甘んずるは、蓋し將に重華を九疑に弔し、屈子を江浜に唁<sup>とちゅう</sup>わんとする乎、悲しむ可き也<sup>31)</sup>」というのは、自殺を暗示する表現であるとし、結語として、漢高が「劉氏に非ずして王たる者は、天下共に之を撃て」といい、また宋の太祖が軍閥の跋扈を憂慮して、杯酒の間に兵権を釈<sup>と</sup>かしたのと同様、朱元璋も創業の功臣を誅滅して、子孫のために禍根を断つたのだという。しかし二十余年に亘つて帝側に侍従した、垂死の老儒を誅し、また遠竄する理由がどこにあるう。彼はただ寵臣と雖も、逆鱗に触れると容赦はせぬことを示し、群臣を懼伏せしめ、己れの意のままに操ろうとしたにすぎなかつたのではなからうか。

劉基（一三二一—一三七五）は字伯温、誠意伯に封ぜられ、文成と諡された一代の英傑で、浙江の東南、青田の人である。元の至順の間、進士に挙げられたが、元末の喪乱に官を棄て、郷里に帰つて『郁離子』を著わし、鬱勃たる野心を秘めて、再起の機を窺っていた。

朱元璋が金華を降すと、その招聘に応じ、「時務十八策」を陳じ天下の形勢を説いた。当時、朱元璋は遙かに韓林兒を戴き、その年号龍鳳を用いていたが、劉基は彼を「牧豎耳、之を奉じて何をか為さん」と言い放ち、

士誠は自守の虜、慮<sup>おもんばか</sup>るに足らず、友諒は……名号正しからず、地は上流に拠る、……宜しく先ず之を図るべし、陳氏滅ばば張氏の勢は孤、一挙して定む可し、然る後北して中原に向かわば、王業成す可き也、

と太祖に告げた。この戦略は孔明の「隆中对」に比せられるが、この策を実施することによつて、張と陳の両強国の間に介在する不利を克服し、天下の統一に成功することができたのである。

潘德輿「論劉誠意<sup>32)</sup>」において、彼の傑出した五点を挙げ、次のように論じている。

- 一、其の天命の真偽を識り、君臣の名分を定め、湯武を以つて其の主を待ち、卓識は人に過ぐ、
- 二、預め大謀を定め、後に符契の若し、……善謀は李善長・陶安の如く、善戦は徐・常諸公の如きも、未だ知るに及ばざる也、
- 三、四方既に定まり、謂えらく宋元は寬蹤にして御を失なう、必ず先ず紀綱を肅し、而る後に惠政行なう可し、……復た謂えらく、雪霜の後、必ず陽春有り、国威大いに立ち、宜しく濟<sup>すく</sup>うに寛を以つてすべし、
- 四、前述のように、彼が朱元璋に対して、楊憲・汪広洋・胡惟庸の用う可からざるを極斥したが、「明祖寤<sup>さ</sup>らず、始めて任を誤り轅<sup>やん</sup>を債<sup>やぶ</sup>り、繼いで遂に永く鈞軸（宰相）を除き、

以って良弼聞く無く、貽謀遠からず、旋ち内乱を構す」、

五、慷慨して天下の安危を論じ、義は色に形る、暇なれば則ち王道を敷陳す、

そして潘は、朱元璋が劉の言に尽くは従わなかったために、治術が雑になったと指摘し、「若し誠意無くんば、則ち天下の事、未だ知る可からず」と断言している。四に「前述のように」と言うのは、『明史』本伝に、朱元璋が劉基に対して、宰相李善長を罷め、楊憲を用いようとした時、基は憲と友善であったにも拘らず、「憲は相才有りて相器無し」と対え、汪広洋に対しては、「此れ褊淺なるは殆んど憲より甚だし」といい、更に胡惟庸については、「之を駕に譬うれば、其の轅を僮るを懼る也」と、すべて否定してしまった。それではと朱元璋が、「吾れの相は、誠に先生に逾ゆる無し」と持ちかけた時、基は「臣は悪を疾むこと太甚し、又た繁劇に耐えず、……目前の諸人は、誠に未だ其の可なるを見ざる也」と謝絶した。しかし彼のこのような発言と人物評価は忽ちに洩れ、当事者を深く傷つけたに違いない。次に劉基と彼らの関係を逐一検討してみよう。

李善長（一三一四―九〇）は滁陽で朱元璋に従い、以後帷幄の謀臣として、初期集団の方針を決定し、「公は濠の産、沛を距ること遠からず、山川の王氣、公当に之を受くべし、其の為す所を法とせよ」と説き、「人を知りて善く任じ、人を殺すを嗜まざれば、五載にして帝業を成さん」と激励した。彼は機面に預り、饋餉を主り、劉邦の蕭何に当る大任を果し、また諸将間の利害の調整をした。朱元璋が即位して功臣を封ずると、善長は徐達・常遇春の子茂・李文忠・馮勝・鄧愈を抜いて第一位となり、中書左丞相を授けられ、韓國公に封ぜられた。

彼は外は寛和を装ったが、内心は伎刻多く、己れを凌ごうとする者を退け、また中丞劉基と争って彼を逐い、その子李祺は臨安公主に尚して、ますます帝寵を固くした。後に大獄を起こした胡惟庸も彼の推薦で拔擢され、彼の弟の子李佑は惟庸の従女壻であったが、何故か善長のみは牽連されなかった。しかし後になって、善長が惟庸の謀叛を知りながら狐疑觀望していたことが発覚し、大逆不道として一族七十余人を并せて誅殺された。年は垂死の七十七歳であった。

楊憲は太原曲陽の人であるが、父の官に従って江南に寓居していた。進んで朱元璋に金陵に謁し、その才辯で次第に頭角を現わし、頭要の職を歴任して中書左丞となった。張昶の才を忌んで彼を陥れ、汪広洋の陰事を暴き、己れに附する者を超抜して羽翼とし、左安礼等八人を誣告したため、却ってその奸謀が洩れて自滅した。楊憲には『明史』に伝はなく、『国朝猷徴録』は『国史実録』を引くが、劉基もこの時、「併せて其の奸状及び諸陰事を発す」と記し、先述の友善関係がすでに破れていたことを示している。また錢謙益は「然らば則ち楊憲を劾奏する者は劉基也」と断じ、更に劉辰の『国初事蹟』を引いて、胡惟庸が李善長に対して、「楊憲 相と為らば、我れ等准人、大官と為るを得ず矣」と言ったと記している。このことは、創業の初期に、呉人はすでに壊滅敗退し、旧元臣・准人・浙人とその他の党派との間に、すでに主導権をめぐる暗闘が始まっていたことを推測させるに充分である。

汪広洋は高郵の人であるが、太平に流寓していた時、朱元璋の幕下に加わり、庶務に手腕を発揮し、江西参政を拜した。彼は廉明持重で新附を撫納したので、人民は甚だ安堵したという。洪武三年、

李善長が病んで中書を辞した時、彼は代って左丞となった。ところが右丞の楊憲が専権し、彼が必ずしも従わなかったため、讒言されて海南に左遷されてしまった。憲が失脚すると召還され、善長の後任として右丞相となり、参政胡惟庸が左丞となった。しかし彼は積極的に発言せず、ただ時勢と浮沈して位を守るだけであった。一二年の冬に至って、涂節が胡惟庸の劉基毒殺を暴露すると、朱元璋は在位中の無為を責め、広南へ貶謫する途次、太平で彼を誅殺した。『明史』は次のように評している。

広洋は少くして余闕を師とし、經史に淹通し、篆隸を善くし、工みに歌詩を為る、人と為り寛和にして自から守るも、姦人と位を同じして去る能わず、故に禍に及ぶ、

胡惟庸は朱元璋と同郷、鳳陽定遠の人である。和州で彼に従い、諸官を歴任してその才能を認められ、洪武三年には參知政事より左丞に進んだ。楊憲が誅されると、彼独りが寵任され、彼もまた精勵し、常に曲謹して帝の意を迎えた。その後次第に驕って、奏請せずし生殺黜陟を行ない、「内外諸司の封事も、必ず先ず取りて閱するほどになった。そこで功臣・武夫や失職者は、争ってその門に赴き、金帛・名馬・玩好の物を贈って、その歡心を購おうとした。大將軍徐達はその奸を憎んで帝に告げたが、納れられなかった。劉基が病んだ時、朱元璋は彼に医を伴わせて見舞させたが、惟庸は報復の機を得て、秘かに彼を毒殺した。洪武一二年冬、占城が入貢した時、そのことを報告しなかったというので帝の怒りに触れ、翌年正月、涂節がその謀叛を上奏すると、連累者は三万人に及び、悉く誅殺されてしまった。

## 六

こうして劉基が不可を論じた宰相は悉く滅んだが、劉基自身もその口舌が禍いして讒言に遭い、朱元璋は彼を「吾が子房也」と評したが、赤松子に随って遊ぶことができなかった。劉基が朱元璋に対して、「目前の諸人は、誠に未だその可なるを見ざる也」と言った時、彼らはみな新參の劉基に対して反感し、秘かに報復の機を窺っていたに違いない。彼は間もなく官を辞して郷に帰ったが、朱元璋が天象について意見を求めると、「霜雪の後、必ず陽春有り、今国威已に立つ、宜しく少しく濟うに寛大を以ってすべし」と、彼は対えた。『明史』はいい、続けて、

基は佐けて天下を定め、事を料ること神の如し、性は剛にして悪を疾み、物と多く忤らう、是に至って還りて山中に隠れ、惟だ飲酒奕棋するのみ、口に功を言わず、

と記しているが、この平安も長くはなかった。以前、劉基は甌・括の間に談洋という隙地があつて、塩の密売者たちの盜藪となつていた。劉基はこのことを長子の劉璉に上奏させたが、胡惟庸は帝に、談洋には王氣があるといわれ、基がその地に墓を造らうとしている、と誣告した。これを疑つた朱元璋にその祿を奪われた劉基は、懼れて直ちに上京し、謝して弁明し、京に留まつたまま敢て帰らうとしなかつた。間もなく惟庸が丞相となると、「吾が言をして驗あらざら使めば、蒼生の福也」と、また不吉な予言をした。憂憤して病を發し、胡惟庸から贈られた薬を飲むと、腹中に拳石のような物が生じ、家に帰って一月余りで歿した。享年六十有五。

当時、金華・浦江・義烏の間には、元季の大儒呉師道・柳貫・黄潜・呉萊・胡長孺が集まり、學術の隆盛は、呉越に冠絶していた。宋濂を始め、王禕・胡翰・蘇伯衡等はみな彼らの弟子である。朱元璋が張士誠に先んじて、この浙東の東南の地を制したことは、その大業の完成に、決定的な役割を果たしたといえよう。しかし宋濂は朱元璋の逆鱗に触れて自経し、劉基が窮地に陥った時も、救おうとさえ試みなかった。胡翰（一三〇七—八一）は幸いにも、『元史』編纂に加わった後に、北山に帰隠して性命を全うしたが、王禕（一三二二—七三）は宋濂と共に『元史』総裁に任ぜられ、翰林院待制に擢んでられたものの、洪武六年、雲南の招諭に赴いて殺された。蘇伯衡の如きは、宋濂が致仕した時、その後任に推されたが固辞し、故郷に帰ることができたが、洪武二年に会試を主つた後、処州教授を授けられた時、表箋の誤りを犯したというので殺され、二子も父を救おうとしたため、併せて刑を被った。

つまり冷酷無比な朱元璋は、彼らを利用し尽した後に、或いは小過を尤めて殺し、或いは見放して自滅に追いこんだ。ある集団がまだ小さく、周囲が敵に包囲されている時はまだよい。結束して自存自衛のため、内紛や内訌を避けるからである。しかし強敵が一掃されてみると、集団——その時は政権と言うべきであろうが、皇帝対臣下、また群臣中の個人対個人の利害は、過去の複雑な経緯を伴って、次第に浮上してくる。当時は自から庄殺していた確執や怨念が、秘かに洩れ出してくる。

新しい王朝が生まれ、元朝が漠北の彼方に姿を消すと、モンゴルの達魯花赤を長とする地方官は、殆んど逃亡し、政府はもろろん地方行政は多大の支障をきたすことになった。朱元璋がたびたび詔令

を発し、或いは四方に使者を派遣して人材を求めたのは、そのためであった。こうして集まった人材を、武官も文臣も争って輩下に加えて、その勢力の拡張を謀ったが、彼らは経歴も同じではなく、必ずしも有能で廉直というわけでもなかった。阿諛便佞の徒も多く、元末の綱紀頹廢に染み、賄賂を貪る輩も少なくなかったのである。

このような腐敗をすでに察知していた朱元璋は、努めて風気を刷新しようと思い、民の害を為す者には、極刑を以って臨んだが、一方では「毎に賢良を旌擧して、以って勸を示し、専ら法に任ぜざる也」と、善行を表彰することも忘れなかった。

趙翼は「重懲貪吏」において、『明史』から三例を挙げ、次のようにいう。

洪武十八年、詔して尽く天下の官吏の民害を為す者を逮え、京師に赴き、築城せしむ（「孝義伝」朱煦伝）。

帝初めて即位し、元政の弛縦に懲り、法を用うること太だ厳なり、奉行者は足を重ねて立つ（周禎伝）。

官吏 罪有らば、笞以上は悉く鳳陽に謫して屯田せしむ（韓宜可伝）。

これらは施行の順に従っていないが、楊一凡「朱元璋の重刑の發展過程と影響」によれば、彼がそのような政策を採ったのは、元末明初の乱世という、特殊な歴史条件の下に生まれたもので、『明史録』等を検討すれば、彼が軽刑を主張した記載も少なくないという。重典の実施については、楊氏はそれを四期に分け、

第一期は朱元璋が起兵してより洪武建元までの時期で、「軍律用刑」を主とし、「焚掠殺戮する母かれ、令を犯す者有らば、処するに軍法を以つてし、縦なる者は罰して赦す母し」と、幾度も布告し

ている。

第二期は開国より洪武一三年の胡惟庸の党案の発生以前で、法は極めて厳酷であったが、法外の用刑はやや少ない。

第三期はそれ以後、洪武二六年の藍玉案までで、法外の刑を用いて肆に臣民を殺戮したのは、この時期には北元の脅威は殆んど消滅し、南方の地主階級との闘争もほぼ決着しており、朱元璋は子孫のために勲臣宿将を肅清して、国礎を鞏固にしようとする時期であると共に、吏治を厳にして濫殺すると共に、殊に贓罪を厳罰した。

第四期は『大誥』の条目を諸条例に列入し、重刑の法律化を進める一方、錦衣衛の刑具を焚き、酷刑を名義上禁じた。と論じている。ここで問題となるのは第二期である。

官吏の腐敗は事実が摘発され、証明されれば処罰は容易である。しかし、時期を異にして朱元璋に帰属した各集団と文人たちは、朋党比周し、保身と栄達を望んで結束し、皇帝の一敵国を形成することもしばしば起こる。朱元璋の軍制改革については、ここでは触れない。しかし規模は小さくとも、政事には必ず派閥が発生する。皇帝は預めそれに備え、防遏策を講じなければならない。

朱元璋が採ったのは、彼らの暗闘を黙認し、機会を捉えて屠り去ることであった。胡惟庸が劉基と対立した時、朱元璋は両者を調停しようとはせず、前者が後者を毒殺するのを見殺しにしたばかりか、彼の帰田に際しては、「君子は交りを絶つても、悪言を出ださず、忠臣、国を去るも、其の名を潔くせず、爾劉基よ、……」と、自分を非難することのないよう誠めている。両者の信頼関係がすでに失なわれている証となろう。

宋濂に対してもそれは同様であった。朱元璋が群臣の可否を問う

た時、彼は「善なる者は臣と友たり、臣は之を知る、其の不善なる者は、知る能わざる也」と対えた。この返答は先の袁凱と同じく、両端を持つるもので、帝は宋濂を偽善者と疑ったかも知れぬ。

桂彦良は慈谿の人であるが、朱元璋が「江南の大儒は、惟だ脚一人のみ」というと、彼は「臣は宋濂・劉基に如かず」と謙遜したが、帝は「濂は文人耳、基は峻隘、卿に如かざる也」と述べたという。両者の蜜月はとっくに去っていたのである。劉基・宋濂・王禕の死によって、創業を成功に導いた浙南ブレインの中樞は壊滅し、その結果、胡惟庸をめぐる初期集団の指導態勢が確立したが、それも真偽の極めて疑わしい事件によって、三万に及ぶ犠牲者と共に消滅してしまった。

朱元璋は行政官の不足に悩み、しばしば詔令を発して天下に人材を求めたことは、すでに述べた。それと共に彼は知識分子の籠絡に努め、種々の手段を弄して、彼らの参加を求めたが、羅炳綿はそれらを段階的に、

- 一、明太祖的文字修養及其檄文與大誥
- 二、親筆写詔以牢籠士大夫
- 三、以文字統治軍事
- 四、元史及礼楽諸書の修写
- 五、奏疏箋表的法式与文字獄
- 六、对国子監課程的監管

と分けて論じているが、胡惟庸の獄が始まった洪武一三年には、彼が復活した科挙制度が徐々に成果を挙げ、皇帝への忠誠心に溢れた官僚たちが活動を開始し、元代の陋習に染まった老吏を駆逐しつつあったのではないか。朱元璋よりも殆んどが二十乃至十歳年長の知



識階級は、当時すでにその使命を終え、ただ未知の運命を待っているだけであった。王世貞は「嗚呼、士の斯に生まるるも、亦た不幸なる哉」と慨歎し、『万曆野獲編』も、劉基の末路に同情して、「雲龍の会合は、千古の稀覯、終りを克くせざるは此の如し、君臣の際は難い哉」と浩歎している。

## 七

朱元璋が密偵を広く放つて、群臣の動静を監視させたことは、先述の宋濂を始めとして多くの例を挙げることができる。国子助教の宋訥は、早くから朱元璋に信任されていたが、彼は陰かに画工を遣わしてその像を画かせたところ、訥は危坐して怒色をあらわにしていた。翌日帝は、お前は昨日何故怒っていたのかと尋ねると、彼は驚いて、諸生が誤って茶器を碎いたので、自からの失教を愧じていたと対え、陛下はどうしてそのことをご存知なのかと問うと、「帝は図を出だす、訥頓首して謝す」と、『明史』本伝はいう。

錢宰は早朝が煩わしいのを厭い、次のような絶句を口占したことがあった。

四鼓鑿鑿起着衣

午門朝見尚嫌遲

何時得遂田園樂

睡到人門飯熟事

翌日太祖は、「昨日の好詩、朕曷ぞ嘗つて汝を嫌わん、何ぞ憂の字に改めざる」といい、「朕は今、儻を放ち回り去らしめん、好く放心熟睡せよ矣」と、彼を解放してやった。この『列朝詩集』が録

する逸話は、極めて稀な好運な例である。

呉琳は詹同の推薦で国子助教となり、官は吏部尚書に至った。告老回郷した後も、宋濂同様、その行動を監視させていた。使者が田植えをしている老農夫に、ここに呉尚書はおられるかと尋ねると、その農夫は「琳是れ也」と答えた。太祖はそれを聞いて嘉歎したと『明史』本伝はいう。

聖天子堯がそうであったように、権力者は自分の評判をひどく気にするものである。「帝力何ぞ我れに在らん」といった太古の時代はともかく、朱元璋は自からそれを確認せずにはおれなかった。彼はしばしば微服して民情を視察し、また不意に臣下の邸を訪れることがよくあった。『剪勝野聞』に、ある時、太祖が京城内を微行していると、一人の老媪が密かに彼を老頭兒と呼んだ。彼は大いに怒って五城兵馬司を召し、「張士誠は小しく江東を窃むに、呉民は今に至るも呼びて張王と為す、今朕は天子為り、此の邦の居民、朕を呼んで老頭兒と為すは何ぞ也」と説き、その多くの民家を籍没したという。

また同書に、太祖が上元の夜、例によって微行していた時、赤脚の婦人が西瓜を懐にしている画が描かれ、皆が集まってその意味を猜っていた。帝はこれが、「淮西の婦人、大脚を好む」という隠語であると喩った。妻の馬氏が淮西の纏足もせぬ階層の出身であることを諷刺したことを知って大いに怒り、翌日、軍士に命じ、あたりの居民を皆殺しにしたという。

しかし徐禎卿は続けて、太祖が微行して徐達の家に行った時、徐はベッドに隠した剣を示し、「之を戒めよ、之を戒めよ、若し他人ならば、以つて汝を戮するを得ん」と諫めた。その後、帝は功臣の

邸を訪れるのを止めたという。朱元璋は密偵をさえ信用できず、自からそれを試みていたのである。彼が錦衣衛を設けてその任を委ねたのは、洪武一五年のことで、侍衛・緝捕・刑獄を掌らせ、更に後年東西兩廠を増置し、宦官にその任に当らせたことは、明代の厭うべき制度であるが、このような特務政治、秘密警察の暗躍は、朱元璋自からその備を成したのである。

朱元璋は即位の前年、侍臣に対して、「文武相い資し、庶くば偏陂する無かれ」と諭し、また「臣は君を諫めざれば、臣の職を尽す能わず、君は諫を受けざれば、是れ君の道を尽す能わず」と、抗言直諫を求めて、謙虚に治国安邦の效を期待した。新国家の建設に、知識分子の積極的な参加と協力を望んだのである。しかし趙令揚は、『列朝詩集』に附された小伝を点検して、当時の名望ある文士たちを次のように列挙して、王彝を除く外は入朝せず、そのために終りを克くすることができたという。

王逢・戴良・李祁・丁鶴年・楊維禎・張昱・陳汝秩・張枢・董紀・高明・葉顥・朱希晦・徐舫・劉養晦・趙汭・王克寛・王彝・徐尊生・曾魯・梁寅・陶宗儀・沈夢麟・鮑恂・鄭淵

このように相い謀って出仕を拒否したと思われる文士に対し、洪武初年にはまだ、強迫的な弾圧を加えることができなかった。まだ北元や辺境に不安が残り、中央で混乱を惹起することはできなかったのである。

趙翼は彼らの不仕の理由を、江南の詩社の盛行や、倪元鎮（瓚）の清閑閣、楊竹西（謙）の不礙雲山樓における豪奢な雅遊を引いて、独り怪しむ、有元の世、文学甚だ軽く、当時に九儒十句の謠有

り、科挙も屢しば興り屢しば廢せらる、宜なる乎、風雅の事は棄てられて弁髦の如きも、乃ち搢紳の徒、風流尚お此の如し、蓋し南宋の遺民故老、相い与に荒江寂寞の浜に唱歎して自り、風流余韻、久しくして替らず、遂に風会と成る、固より朝廷令甲の軽重に繫らざる歟、

と推測している。無錫の倪雲林と松江の楊竹西には、なお崑山の顧徳輝（仲瑛）の玉山草堂を加えることもできよう。文中の九儒は、当時の社会階層を十級に分けた時、儒者の身分は最下位の句の上に位置し、極めて蔑視されていた、というのである。

これに対して近人鄺士元は、次の三つの理由を挙げている。

一、一般の文人は過去の放縦な生活を忘れることができず、新朝に協力しようとしなかった上、儒生が先朝を崇重する風気があったこと。

二、朱元璋の監視とその猜疑心を恐れたこと。

三、知識分子は元季の自由な雰囲気を愛し、明初の法家政策に好感が持てず、その求賢を重視しなかったこと。

そしてその結果、朱元璋は求賢が多く成功せず、また先述した『元史』編纂後、彼の好遇慰留にも拘らず、彼らがすべて辞任したことによって、皇帝としての自尊心が過度に傷つけられ、それが出自の卑賤という劣等感に結合して、彼らを離間し監視し、侮辱・恐嚇の後に、屠殺したのではないか。

少数の例外を除いて、仕進の途をとざされた元代の文人たちは、モンゴルを卑視しつつも、それなりの環境に適応し、微官に就いて学芸に専念するか、或いは林下に退居して自活の手段を講ずるか、いずれにせよ徐々に各自の状況に馴化して暮らしていた。一方、元

朝も適度に鷹揚で、漢人の慣習にあまり干渉せず放置していたため、知識分子の多くは、太平の世の逸民としての生活を、それなりに享受していたのである。

しかし淮右に起った戦乱が江南に波及し、規模が拡大してくると、知識分子は安全を求めて、次第に張士誠の支配する、いわゆる呉の地域に集まってくるようになった。

張士誠は高郵の塩徒であったが、同志を糾合して叛乱を起こしたのは、至正一三年夏(一三五三)のことであり、朱元璋は漸く郭子興の鎮撫に任せられた頃である。翌年、元の丞相脱脱は張士誠を高郵に破り、殲滅的な打撃を与えたが、脱脱の罷免によって幸いにも免れ、江を渡って平江(蘇州)を占拠した。時は奇しくも朱元璋が集慶に拠ったのと同じ頃であった。こうして両者は常州と宜興を挟んで対峙することになったが、士誠は奢侈に耽り、呉中の富強を過信して進取の計をなさず、諸將もそれに倣ったため、志気は全く弛緩してしまった。しかしその寛厚を慕って、「諸僑寓の貧にして籍無き者、争いて之に趨く」と『明史』<sup>(81)</sup>が述べるように、当時の士大夫や文芸の士は、出仕を拒否しつつも、ここに安住していたのである。十余年に及ぶ両者の対立も、湖州の激突で士誠が大敗を喫し、大勢は朱元璋に傾いたが、それでも平江は実に十ヶ月の包囲に耐え、落城に及んでなお巷戦を続け、裏切る者はなかったのである。そして彼の死後ですら、「死すとも怨みず泰州の張」と賛えられたが、これに対して勝利者である朱元璋には、江南では何故か人氣がなかった。最初に引用したように、趙翼は「明祖以不嗜殺得天下」と説いたが、果してそれは事実だったのであろうか。淮南の諸軍が

カニバリズム  
人肉嗜食集団であったことは、すでに例を挙げたが、渡江以来そのおぞましい習慣は根絶され、人民の殺戮も全く影を潜めたのであるか。

胡大海といえ、朱元璋麾下の良將として知られるが、「吾れ武人にして書を知らず、惟だ三事を知るのみ、人を殺さず、婦女を掠めず、廬舎を焚毀せず」と言ったと『明史』<sup>(82)</sup>はいう。しかしこのことを特筆すること自体、彼が例外的な存在であったことを、暗に示しているのではないか。その証拠に、朱元璋が天下統一の方策を、次つぎと彼の幕下に加わった諸臣に諮った時、李善長も陶安・陳遇・章溢その他も、口を揃えてまず「不殺」を説いている。これは諸將の多くが、朱元璋の法度に叛いて、殺人を続けていたことの反証ではないのか。徐達を始め、創業に貢献した諸將は、年齢的には殆んど朱元璋と前後し、彼が即位するまでは、軍紀違反を厳罰することができなかつたのではないか。例えば朱亮祖は、「勇敢にして善く戦うも、学を知らず、為す所は不法多し、その子暹と俱に鞭死す」と『明史』<sup>(83)</sup>は言うが、これはすでに洪武一三年のことである。

平江が陥落し、張士誠が捕われて殺され、饒介を始めとする彼の高官たちは、その責任を問われて多く殺されたが、その中に張士誠の弟士信の相となつた黄敬夫・蔡彦文・葉徳信の三人も含まれていた。呉人は十七字を作つて、「張王は事業を倣すに、只だ憑る黄葉、一夜西風来り、乾鱉す」と歌った。<sup>(84)</sup>朱元璋はこれら三人を誅すると、その屍体を竿に懸け、風にさらしてミイラにしたという。このことを詠じた清初の尤侗は、

君見ずや、老頭兒は短にして、婦脚は長し、九四郎死して、張王と呼ぶる、

と、その『明史樂府』<sup>(87)</sup>にいうが、老頭児と張王の対比はすでに説いた。

九四は張士誠の初名であるが、彼が呉王を称するに及んで、士誠と名を改めた。<sup>(88)</sup>ある人の勧めであったが、それは『孟子』公孫丑下の、「士は誠に小人也」という句を用いたものであった。後になつてこのことを聞いた朱元璋は、文人たちが己れを愚弄し、また諷刺しているのではないかと、極度に神経を尖らせ、そのため頻繁に文字の獄を起こしたといわれているが、これについては触れる余裕がない。

明初と朱元璋の記事には、隱諱曲筆が多いと言われている。呉人は淮人の残忍と殺戮を早くから耳にし、平江の落城に際しても、同様の行為があつたかも知れない。朱元璋の側でも、最後まで頑強に抵抗した呉人を憎み、彼らを多く鳳陽に移住せしめ、種々の経済的制裁を加えたことには、多くの研究がある。呉人が朱元璋に対して抱いていた恐怖は、それ故、常軌を逸した点があつたかも知れない。洪武九年、星変によつて朱元璋が直言を求めた時、寧海の葉伯巨<sup>(89)</sup>は、古えの士為る者、登仕を以つて榮と為し、罷職を以つて辱と為す、今の士為る者、跡を溷<sup>みだ</sup>して聞こゆる無きを以つて福と為し、玷を受けて録されざるを以つて幸と為す、

と述べたが、それは彼自身が示してきた行為の、当然の結果であつた。彼はこうして不服従の文人たちを、陰險な手段で排除し、或いは微過によつて、公然と処刑した。趙翼<sup>(90)</sup>は、

明祖は元季の縦弛に懲り、一切重典を用う、故に人は多く仕進を樂しまず、

と説いたが、それは皮相な見解にすぎない。彼は自身が育てた官僚

たちが、彼に絶対的な忠誠心をもつて、國家の經營に参加するまで、まず元の降臣を選別し、呉人を弾圧し、浙人を自滅せしめ、最後には淮人を胡惟庸の獄に牽連して、すべて肅清してしまつたのである。

## 八

文人ばかりではなく、その同類である書人や画家に対しても、朱元璋の恣意的な処罰や殺戮は、殆んど常軌を逸していた。元代には宮中に画院が設けられなかつたので、画家の多くは文人であり、書人もそうであつた。詹希原が帝の命で集賢殿の額を署したところ、門の字の末筆がやや鉤になつた。朕は賢者を集める門を広くしたいと望んでいるのに、希原は却つて門をとざしてしまつたと怒り、彼を誅殺してしまつた。<sup>(91)</sup>また『襄齋瑣綴録』<sup>(92)</sup>によれば、南京国子監内の号房にはみな門限<sup>しきい</sup>がなかつた。同じ理由でそうしたのである。そして詹が書いた字は、「粉を以つて鉤画を塗り、今に至るも粉跡宛然たり」と述べている。鄭暁<sup>(93)</sup>は「大字を善くし、欧虞顔柳を兼ね、凡そ宮殿城門坊の扁は、皆な希元の書」というが、その名声が仇となつてしまつたのである。

画人については、奇しくも同題の「朱元璋对画家的迫害」の二論がある。一篇は張仲權、他は劉海粟の作<sup>(94)</sup>であるが、後者は先年に破した著名な画家で、内容は殆んど材を前者より借りたと明記しているので、前者を参照するだけで充分である。

歴代の皇帝で絵画の愛好者は少なくなく、名品の蒐集に努めた者は多いが、中には北宋末の徽宗のように、画院の組織者であり、かつ指導者を兼ねた者もいる。彼は画院の画家に官位を与えて保護し

たばかりか、自からも多くの名作をのこした。これに反し、何故か彼らに反感をもち、唐末の晋王李克用のように、韓求（虬）や李祝など、当時の著名な画家を殺した者もある。

朱元璋は軍事上の見地から地図を重視し、<sup>(一三六六)</sup>至正二六年、蘇州に拠る張士誠を包圍攻撃した時、画家にその地勢や要害を写させ、それによって作戦を成功させ、<sup>(一三六九)</sup>また洪武二年には、四川に拠る明玉珍の子明升を伐つに際し、彼は蔡哲に命じて画家を同行させ、<sup>(一三六九)</sup>潜かに山川の險易を悉く描かせ、その国夏を亡ぼす時に利用したという。

朱元璋を写した像は、多く今に伝わっているが、中でも金陵の陳遇・四明の陳遠・崑山の沈希遠・祥符の孫文宗が描いたものは、その名と共に知られている。彼は好んで微行して民情を探ったことは先に述べたが、その際、自から姿を見破られるのを慮って、多くの仮像を描かせた。最初、画家たちは帝の意図を知らず、逼真の像を写したため、帝の不興を買った。後にそれに氣附いた者は、その怪容を美化したところ、帝は大いに喜び、その虚像を多く作らせて諸王に分賜し、真像は却って太廟中に蔵したといわれている。<sup>(一三七)</sup>このことについては、最後に再び触れよう。

朱元璋は封建秩序を再建するに当って、絵画による勸善懲悪を教化に利用し、「教化を成し、人倫を助ける」という目的を強化しようとした。『前聞記』<sup>(一三九)</sup>には、「後宮の屏幃垣壁、多く耕織像を絵く」といい、また趙原を召して昔賢像を画かせたともいう。

明初は元末の遺風を承けて、文人中に画を善くする者が多く、史料を博搜した張氏は、洪武年間の画史に伝ある者は約百二十名、その中の五十八人が朱元璋に籠絡され、

一、召されて京師に至り、像を写す者四人、

二、画を以って内府に供奉する者二人、

三、能画を以って召され、京師に至る者四人、

四、召されて就かざる者六人、

等と分類を試みた上で、士大夫中で能画或いは画家として、官を授けられた者は四十七人に及ぶ、と言っている。

有名な元季四大家中の倪瓚（雲林）は、無錫の大富豪であったが、税の滞納で郡獄に囚われ、洪武七年に歿した。

同じくその一人王蒙（黄鹤山樵）は、趙孟頫（子昂）の外孫であったが、胡惟庸の獄に牽連して逮捕され、洪武一八年に至って瘐死した。瘐死とは獄中で病死することであるが、彼はただ華克勤と共に、胡惟庸に招かれ、その邸で画を觀、茶を喫しただけであった。五年の拷問の末に死んだと言われている。<sup>(一四〇)</sup>

陳汝言は張士誠の女婿潘元明の客となったことがある。洪武初年に済南経歴となり、法に坐して誅せられた。刑に臨んで従容と染翰し、画き畢つて刑に就いた。その罪状は明らかではないが、張羽がそのことを記し、錢謙益は「嵇生の琴、夏侯の瑟に視ぶるに、尤も難事と為す」と称賛している。

高啓（季迪）の刑死については先に述べたが、いわゆる吳中四傑の彼を除く他の三人は、みな絵事に堪能であった。

張羽（采儀）は朱元璋に仕えて、太常丞を授けられたが、後に嶺表に遠流され、途中で召還の命を受け、京師に戻ったが、免れざるを知って、龍江に投じて死んだ。『明画録』<sup>(一四一)</sup>によれば、米法山水を得意としたという。

徐賈（幼文）は、徐達が四川に出兵した際、通過する軍隊に慰勞を欠いたということで、投獄されて死んだ。「其の山水林石、遡麗

清潤、濯々として愛す可し」と『明画録』は評する。

楊基（孟載）は張士誠の参政であった饒介の客であったというので、臨濠に安置され、更に鍾離に謫せられた。のち江西行省の幕官となったが、省臣の罪に連座して落職し、最後には山西按察使となったものの、讒言を被って労役を課せられ、やがて死んだ。『無声詩史』はただ、「篇題の外、兼ねて絵事に及ぶ」と記し、その画風については触れる所がない。

王行（止仲）は蘇州の人で、澆墨山水を得意とし、洪武初年、郡学の経師となったが、のち罷めて石湖に隠れた。好んで兵事を談じたが、そのことが禍いしたのか、藍玉の党に連座して殺された。

趙原（善長）は呉に寓し、『無声詩史』には、「王右丞・董北苑を師とし、善く山水を写す」というが、洪武の初年、徴せられて「昔賢図」を描いた。応対が帝の意に忤つたというので殺された。

盛著（叔彰）は嘉興の人で、山水・花鳥を得意としたが、洪武中に内府に供事して、帝の賞遇を得た。のち天界寺の影壁に、水母が龍の背に乗る図を描いたところ、皇帝のシンボルである龍に水の女神が乗るとは何事か、ということ棄市されてしまった。『明画録』に見える。

孫蕢（仲衍）は広東順徳の人で、洪武三年進士。同一五年に蘇州府経歴となったが、藍玉のために画に題したというので殺されてしまった。刑に臨んで次の詩を口占したという。

鼉鼓三聲急

西山月又斜

黄泉無客舍

今夜宿誰家

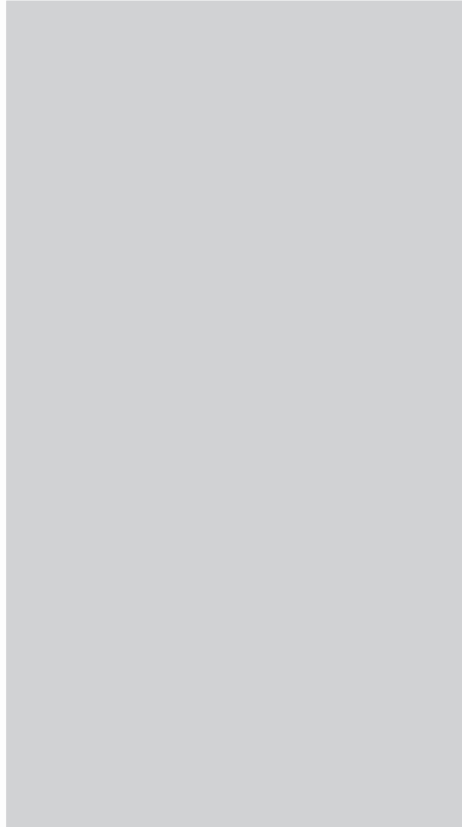
『碧里雜存』によれば、太祖はこの詩を聞き、どうしてすぐに覆奏しなかったのかと怒り、併せて監察指揮を斬ったという。

当時の画家の悲運について、多くの例を挙げたが、彼らの殆んどが呉人であることは、注目されてよいであろう。張仲権はこの他になお多くの例を挙げるが、朱元璋の画家に対する迫害は、洪武三・四年の陳汝言に始まり、同二六年の王行・孫蕢の誅殺に終るとし、その間実に二十余年に及ぶとし、人数は最多、株連は最広、範圍は最大、手段は最毒辣、持続時間は最長であるが、罪名は「莫須有」（秦檜が忠臣岳飛を裁いた罪名）であったと結論して、その理由をすべて朱元璋の残忍無類の性格に帰している。しかし子孫の将来を守るために、胡・藍の獄で功臣の殆んどを肅清した彼が、無害ともいえる書画家に対して、このような惨酷を以って臨んだ理由については述べられていない。

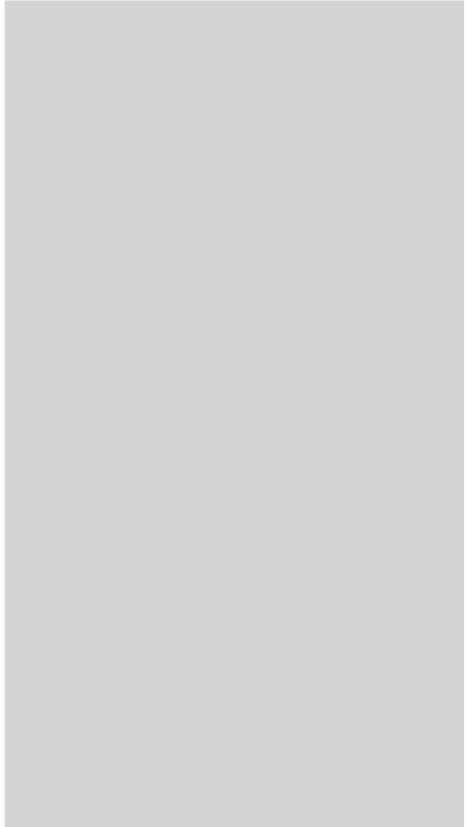
人の性格はその容貌に反映する。『明史』は朱元璋のそれを、「姿貌雄傑、奇骨貫項、志意廓然として、人は能く測る莫し」と記し、『名山藏』では「日章天質、鳳目龍姿、声は洪鐘の如く、奇骨貫項」という。両者共に天容を写す際の常套句で、具体性を示すのはただ、「奇骨貫項」という表現だけである。

台北故宮に現在、「明太祖像」十二幀が蔵されているが、それらの容貌は互いに異なり、索予明はそれらを甲乙二類、甲像（挿図1）を「面稍や偏側、黒痣盈面」、乙像（挿図2）を「貌豊偉、無黒痣者」とに分け、さまざまな理由を挙げながら、「二説は各おの拠る所有り、言の理を成すは、孰れが是非と為すかを、遽には定論し難し」と、断定を避けている。

しかし朱元璋の出身の卑賤と旺盛な猜疑心より推せば、痣の多い



(挿図2) 朱元璋像 乙像



(挿図1) 朱元璋像 甲像

醜陋な容貌が、その真であるに相違ない。郭子興がその状貌を奇として親兵に留め、相術を善くする郭山甫が彼を見て大いに驚き、その二子を彼に従わせたことからすれば、彼が異相を具えていたことは確かであるが、前述の「奇骨貫項」という表現からは、項は首筋であるから、正面からその輪郭を察することはできない。

朱元璋の微行については先に述べたが、明末の談遷は、「人の其の貌を識るを恐れ、其の諸王侯に賜う御容は、一（種）、蓋し疑像也」といい、甲乙の真偽に触れないが、疑像であるとしても殊更に醜陋に画く必要はなく、伝存する御容に甲像が圧倒的に多く、小異は認められるとしても、それらが互いに相似であることは、それが真容の証拠ではないか。

豊偉というのは、太平の天子にふさわしいイメージで、その神采が群臣を畏めしめるのを知って、常に温顔を以って接したといわれる唐の太宗李世民や、龍行虎歩して、兄の趙匡胤をして「福徳は吾が及ぶ所に非ず」と歎せしめた、宋の太宗などがそれに該当しようが、残念ながら我われの朱元璋にはふさわしくない。

むかし越の范蠡はその主勾踐を、「長頸烏喙、与に艱難を共にす可きも、与に安楽を共にす可からず」といい、輕舟に乗じて五湖の煙波に姿を消したが、朱元璋は長頸烏喙ではないとしても、項に奇骨があり、隆鼻高顴、額顎突出、黒痣盈面、顴頬眉目は大いに常人と異なり、いわゆる「五嶽朝天」の象であるというが、街巷の老嫗に「老頭児」と呼ばれたように、皇帝の威厳が全く具っていないことは確実で、これら甲像より察する限り、その性格が如実に反映されているように思われる。一言蛇足を加えておく。

〈参考文献〉

- 1 朱元璋『明太祖御製文集』（台湾学生書局、一九六五・一一）
- 2 胡士尊点校『明太祖集』（黄山書社出版『安徽古籍叢書』、一九九一・一一）
- 3 方覺慧『明太祖革命武功記』（台北文海出版、一九六四・四）

- 4 錢謙益「太祖實錄辯証」(『初學集』所收)
  - 5 王崇武「明史本紀校注」(龍門書店、一九六七・二)
  - 6 孫正容「朱元璋系年要錄」(浙江人民出版社、一九八三・二)
  - 7 吳晗「朱元璋傳」(人民出版社、一九八五・一〇)
  - 8 李唐「明太祖」(香港宏業書局出版、一九七八・六)
  - 9 管玉春・呂武進「朱元璋」(中華書局「中國歷史小叢書」、一九八二・四)
  - 10 呂景琳「洪武皇帝大傳」(遼寧教育出版社、一九九四・八)
  - 11 万明「明太祖本傳」(遼寧古籍出版社「中國十大皇帝本傳叢書」六、一九九六・四)
  - 12 修曉波・田澍「朱元璋」(北京學苑出版社、一九九七・六)
  - 13 黃冕堂・劉鋒「朱元璋大傳」(南京大學出版社、「中國思想家評傳叢書」一九九八・一二)
  - 14 谷口規矩雄「朱元璋」(人物往來社「中國人物叢書」9、一九六五・九)
  - 15 檀上寬「明の太祖朱元璋」(白帝社「中國歷史人物選」9、一九九四・七)
  - 16 南條範夫「明の朱元璋」(講談社「中國の群雄」7、一九九八・二)
  - 17 陳寬強「歷代開國功臣遭遇」(嘉新水泥公司文化基金會出版、一九六六・二)
  - 18 黎東方「細說明朝」第一冊(台北傳記文學出版「文史新刊之二一七」、一九七一・五)
  - 19 丁易「明代特務」(中外出版、一九五一・六再版)
  - 20 楊一凡「明初重典考」(湖南人民出版社、一九八四・四)
  - 21 姬樹明・俞風斌「劉伯溫与朱元璋」(浙江人民出版社、一九八四・一〇)
  - 22 鄭克成「明代政爭探源」(天津古籍出版社、一九八八・一二)
  - 23 羅冬陽「明太祖礼法之治研究」(高等教育出版社、一九九八・一二)
- 以上は16を除き、すべて弊架に蔵するものである。

〈注〉

- 1 参考文献6。
- 2 『明史』卷二二二・韓林兒伝。
- 3 傅維麟「明書」卷九三・李善長伝。
- 4 『明史』卷一・太祖本紀一。
- 5 趙翼「廿二史劄記」卷三六・明祖以不嗜殺得天下。
- 6 同右、明祖重儒。
- 7 野口鉄郎「初期朱元璋集團の性格」(『横浜国立大学人文紀要』第一類哲学社会科学・第一八号、一九七二・一〇)。
- 8 以下の論述については、羅炳綿「明太祖的文字統治術」一・明太祖的文字修養及其檄文與大誥參照(新亞研究所出版「中國學人」第三期、一九七一・六)。
- 9 『明史』卷三・太祖本紀三。
- 10 同卷二。
- 11 『明史』卷二八五・文苑一・趙璜伝、また同徐一夔伝參照。
- 12 同右、楊維禎伝。また拙稿「楊鉄厓樂府序説」(『帝塚山大学紀要』一、一九六四・一二)。
- 13 同右、高啓伝。
- 14 拙稿「高啓詩」(朝日出版社「近代詩集」明詩所収、一九七一・五)。
- 15 拙稿「白燕詩攷」(『入矢・小川教授退休記念中國文學語學論集』所収(筑摩書房、一九七四・一〇)。
- 16 『明史』卷二八五・文苑一・袁凱伝。
- 17 陸深「金台紀聞」不分卷。
- 18 陶宗儀「輟耕錄」卷九・樹鳴。
- 19 同右・想肉。
- 20 『明史』卷二二八・章溢伝。
- 21 沈文「聖君初政記」不分卷。
- 22 王文祿「龍興慈記」常遇春妻。
- 23 徐禎卿「剪勝野聞」不分卷。
- 24 周亮工「因樹屋書影」卷二。
- 25 余永麟「北牕瑣語」。



- 26 趙翼『廿二史劄記』卷三三。  
 27 同卷三二。  
 28 『明史』卷一・太祖一。  
 29 同右。  
 30 陸深『豫章漫抄摘錄』不分卷。  
 31 沈德符『萬曆野獲編』卷一五・科場。  
 32 『明史』卷一三五・本伝。  
 33 王世貞『鳳洲雜編』一・元遺諸臣。  
 34 祝允明『前聞記』不分卷。  
 35 『明史』卷一八五・本伝。  
 36 黃溥『間中今古錄摘抄』不分卷。  
 37 『元史』卷一八七・本伝。  
 38 注23に同じ。  
 39 『新元史』卷二二三・本伝。『明史』卷一二四。  
 40 郎瑛『七修類稿』卷八・張昶。  
 41 趙翼『廿二史劄記』卷三二。  
 42 同卷三〇。  
 43 『明史』卷二二四・本伝。  
 44 『明史』卷二八五・文苑一。  
 45 同右。  
 46 『明史』卷二・太祖二。  
 47 王鏊『守溪筆記』。  
 48 注23に同じ。また王泌『東朝紀』参照。  
 49 注47に同じ。  
 50 詹長皓「試論明初大儒宋濂之死」(大立出版『明史研究專刊』第五期所収、一九八二・二二)  
 51 方孝孺『遜志齋集』卷一〇・祭太史公八首。  
 52 潘德輿『養一齋集』卷一三・論劉誠意。  
 53 『明史』卷二二七・李善長伝。  
 54 焦竑『國朝獻徵録』卷一一・資善大夫中書左丞陽曲楊憲伝。  
 55 錢謙益『初學集』卷一〇三「太祖實録辨証」三・洪武三年七月楊憲伏誅。

- 56 『明史』卷二七・汪広洋伝。  
 57 以下は『明史』卷三〇八・姦臣伝による。  
 58 『明史』卷二二八・劉基伝。  
 59 『明史』卷一六九。  
 60 『明史』卷二八九。  
 61 『明史』卷二八五。  
 62 『明史』卷一四〇伝贊。  
 63 趙翼『廿二史劄記』卷二三。  
 64 楊一凡『明初重典考』(湖南人民出版社、一九八四・四)。  
 65 劉基『誠意伯文集』卷一・御賜歸老青田詔書。  
 66 『明史』卷二二八・宋濂伝。  
 67 『明史』卷一三七・桂彦良伝。  
 68 胡惟庸の獄については、錢謙益『太祖實録辨証』が、最も多くの資料を提供する。  
 69 注8参照。  
 70 王世貞『芸苑卮言』卷六。  
 71 沈德符『萬曆野獲編』卷五・勲戚。  
 72 『明史』卷一三七・宋訥伝。  
 73 錢謙益『列朝詩集』甲集・錢博士宰小伝。  
 74 『明史』卷一三八・吳琳伝。  
 75 注23に同じ。  
 76 『明實録』太祖、四二二―四三三頁。  
 77 同右、四二二―二頁。  
 78 趙令揚「論明太祖政權下之知識分子」(『明史論集』史学研究会、一九七五・六)。  
 79 趙翼『廿二史劄記』卷三〇・元季風雅相尚。  
 80 鄒士元「明初知識分子的遭遇」(『國史論衡』二上、香港波文書局、一九七九・九)。  
 81 『明史』卷二二三・張士誠伝。  
 82 同卷二二三・胡大海伝。  
 83 同卷一三六・陶安伝。  
 84 同卷一三五・陳遇伝。

- 85 同卷一三二・朱亮祖伝。  
 86 注23に同じ。  
 87 尤侗『明史樂府』百首第三・齊雲樓。  
 88 注36に同じ。  
 89 『明史』卷一三九・葉伯巨伝。  
 90 注41に同じ。  
 91 注21に同じ。  
 92 尹直『藝齋瑣綴録』不分卷。  
 93 鄭昉『吾学編』。  
 94 張仲樞「朱元璋对画家的迫害」(中国美術家協会江蘇分会編『美術縱横』第一輯、一九八二・一)。  
 劉海粟「談元璋对画家的迫害」(山東美術出版『齋魯談芸録』所収、一九八五・四)。  
 95 吳寛『平吳録』。  
 96 黄標『平夏録』。  
 97 談遷『棗林雜俎』逸興典。また陸容『菽園雜記』卷一一。  
 98 『続資治通鑑』卷二二八。  
 99 注34に同じ。  
 100 錢謙益『列朝詩集』甲集・黄鶴山樵王蒙小伝に、『清教録』の語を引く。  
 101 同右。陳経歴汝言。  
 102 徐沁『明画録』卷二。  
 103 同右。  
 104 姜紹書『無声詩史』卷一。  
 105 『明史』卷一八五・文苑一。  
 106 注104に同じ。  
 107 注102に同じ。  
 108 董穀『碧里雜存』孫賁。また注31に同じ。  
 109 『明史』卷一・太祖一。  
 110 索予明「明太祖画像攷」(『故宫季刊』第七卷三期、一九七三・春)。  
 111 注109に同じ。  
 112 毛奇齡『彤史拾遺記』。

- 113 注97に同じ。  
 114 注110の三「辨真偽」の索予眼の語。

〔挿図〕

- 1 索予明「明太祖画像攷」(『故宫季刊』第七卷三期、一九七三・春)より複写。  
 2 同右。

〔追記〕

趙翼は「胡藍之獄」において、

明祖は諸功臣を藉りて、以つて天下を取り、天下の既に定まるに及んで、即ち尽く天下を取るの人を挙げて、尽く之を殺す、其の残忍は、実に千古未だ有らざる所、蓋し雄猜好殺は、其の天性に本づく、

と評し、『明史』を始めその他の資料も、彼の殺戮をその都度列記するに止っているが、私は彼の文人に対する暴虐や凌辱・殺戮が、恣意的かつ衝動的なものではなく、何か深刻な意図を秘めた、計画的な行動ではなかったのかと、久しく疑ってきた。しかし今回、執筆直前になって、集めた資料の約半分を紛失し、一旦辞退を申し入れたが、偶然それが見つかった時には、一月余の時間しか残されていなかった。他にも多く仕事を抱えているので、資料の半分も活用できず、胡惟庸・藍玉・空印・郭桓の四案と、有名な文字の獄や、『孟子』に対する彼の嫌悪等については、全く論及できなかった。慚愧に堪えない。いずれ補修を加えて書き改めたいと願っている。読者の宥恕を乞う。